

2012 年 9 月 1 日発行 第 129 号

目 次

P1 巻頭言「長門芳子理事	P6-7 モンゴル人文大学訪日団・1 日東京案内
P2-3 MUA サロン 森村俊介理事	P8-9 講演会「外交とユーモア」大塚清一郎大使
P3-4 三田高校ユネスコ委員会の事務局来室	P10-13 UNESCO ユースフォーラム in みなと 2012
P5 ブラジルの家庭料理 西村アメリカさん	P14 事務局便り／編集後記

港ユネスコ協会との出会い ―私の活動の原点― 港ユネスコ協会理事 長門芳子



素晴らしい出会いは人生を何倍も豊かにする。1974 年 12 月末から 7 年余り夫の転勤で港区三田 4 丁目の社宅に住んだ。息子が入学した明治学院高校の P T A 活動、朝日カルチャーセンターや港区教育委員会主催の各種講座を受講、私が社会参加に目覚めた頃である。「国連婦人の十年」という世界的な新しい波は主婦にとって追い風となり「港区婦人学級」の企画運営委員の一人としてプログラムの企画立案・実施を素敵な仲間とご一緒に担いながら、多くの学びの場と貴重なチャンスを頂いた。

1981 年 4 月末、港区教育委員会の要請で、5 月 22 日国際文化会館で開催された「第 1 回港ユネスコ協会設立発起人会」に出席した。出席者は、日本を代表する著名な方ばかりで、一区民の立場で緊張して参加した主婦の私は、場違いな感じで少し不安になった。しかし、足利ユネスコ協会事務局長として活躍していた父が、突然交通事故で亡くなって間もない頃で、不思議な縁を感じ「頑張ってみよう」と心に決めた。

1981 年 10 月 17 日、白金迎賓館を会場に盛大に開催された「港ユネスコ協会設立総会」を機に活動を開始した。丹下健三 初代会長、三輪公忠 二代目会長の下、常任理事・婦人活動委員長として、協会揺籃期の婦人活動委員会が企画した事業は、1983 年 1 月、難民支援の「外国人にお正月行事を紹介するチャリティニューイヤーパーティ」、1983 年 8 月「インドシナ難民と子どもの国へ One day キャンプ」、1982 年 6 月、国際パネルディスカッション「80 年代国際化時代の女性の生き方」(英語・日本語)これらの事業は、協会役員が一丸となりバックアップ、港区青年会議所、婦人学級・キャンプリダー仲間の協力を得て開催。テレビや新聞に数多く報道された。

港ユネスコ協会の大きな胸を借り、民間団体の組織作りとボランティア活動のノウハウを学んだことは、宇都宮に戻ってからの私のすべての活動の原点となっている。

1983 年 6 月 6 日、「この地に国際的なボランティア活動を根付かせたい」の熱い思いから、新聞・ラジオの呼びかけで仲間を募り、ユネスコ理念を掲げ「いっくら国際文化交流会」を創立。三輪公忠会長に英語名: Inter Cultural Community Life Association」と命名して頂いた。良き指導者とバイタリティ溢れる素敵な仲間、支援者・応援団と多くの素晴らしい出会いを重ね 30 年に亘る「地球家族のきずな求めた」国境を超えた交流の対象国は 130 余か国となった。

「外務省長期青年招聘事業」研修受入れの研修生は、14 年間に北東・中央アジア 13 か国 180 名となり、帰国後は知日派知識人として活躍している。外務省モンゴル元研修生有志が創設した「ウランバートルいっくら」は本格的な活動を開始。去る 6 月 16 日～25 日、創立 30 周年記念事業で招聘したモンゴル訪日団を港ユネスコ協会が東京一日ツアーに招待して頂き素敵なプレゼントとなった。宇都宮ユネスコ協会青年部「宇都宮大学 UNESCO 研究会」企画の「UNESCO ユースフォーラム in みなと」も今年 2 度目の招待となり、このように地方では決して出来ない体験をさせて頂けることに深く感謝している。

(いっくら国際文化交流会会長、宇都宮ユネスコ協会会長)

「世界 100 カ国訪問記」

～アフリカのサファリから世界 100 回のマラソンまで～

講師：森村俊介 港ユネスコ協会理事

日時：2012 年 6 月 28 日（木）午後 6 時 30 分～8 時 30 分

会場：港区立生涯学習センター 港ユネスコ協会事務局



会員を対象とする MUA サロン。今回の話者は森村商事株式会社の会長の要職にあり、当協会の理事である森村俊介さんです。出席者全員にご自身の著書「世界 100 カ国訪問記」がプレゼントされました。

資料として、森村さんがメンバーであるサバンナクラブ（東アフリカ友の会）への寄稿文、これまでの国内 47 都道府県の完走記録リスト、ご自分が選んだ国内マラソン人気ランキングベスト 10 等が配布され、ユニークな講演会が始まりました。

話の主たるテーマは 2 つ。1 つはこれまでに訪問された 100 カ国について。2 つ目はこれまでに 100 回以上参加されたマラソンのお話でした。さらに、森村さんはコントラクトブリッジの名手であり、昨年開催された国際大会では優勝され、新聞にも掲載されたことが司会者から紹介されました。



講演内容

大学時代の 19 歳の時に、初めてヨーロッパ旅行を経験して、旅の魅力にとりつかれました。卒業後金融機関で十数年勤務をしながらも、各国を訪問したいという夢は捨て難く、思い切って退職して、「60 歳までに 100 カ国を訪問する」という目標に向かってスタートしました。

52 歳の時には大きな島、ボルネオ、グリーンランド、アイスランドを訪問しました。キューバはカストロの在職中に訪れました。99 カ国目にはギアナ高地を訪れ、100 カ国目は 59 歳の時にクロアチアへ行きました。

それでは、私が独断で選んだ訪問先・世界のベスト 10 の中からベスト 5 を紹介いたします。

第 5 位は、王家の谷（エジプト）です。これは大好きな作家アガサ・クリスティーに惹かれて訪れました。エジプト・ルクソールにあり壁画が大変素晴らしかったです。

第 4 位は、カトマンズです。ここは寺院が大変多く、また、お祭りも大変多い場所です。意外でしたが料理も美味しく、私はインド料理よりも好きです。エベレストがあるために様々な援助もあります。

第 3 位は、オカバンコ・デルタです。ここは南アフリカのボツワナにあり、気候が大変素晴らしい。少人数でもサファリが可能なサバンナの国です。

第 2 位は、ンゴロンゴロ噴火口です。東アフリカ・タンザニアにあり、サファリの素晴らしい場所です。

第 1 位は、マサイ・マラ保護区です。ここは東アフリカ・ケニアにあり、やはりサファリには最高の場所です。大変馬の種類が多い。日本人が作った“ムパタ”ロッジはサファリを楽しむにも最高の場所です。

以上がベスト 5 ですが、サファリが大好きなので、必然的にベスト 3 はすべてアフリカになってしまいました。

次にマラソンの話をします。

マラソンの楽しみ方はいろいろあると思います。

私は 42.195 キロを競い合うマラソンよりも、開催地の景観や様々なホスピタリティーが感じられる、そして楽しめるマラソンを選んで参加してきました。

世界各国のマラソンも含め、60 歳迄に 100 回達成しました。と申しても、距離も様々で、短いものから 100 キロマラソンまであります。その中から独断でランキング 10 位までを選び、ご紹介します。

第1位は、サロマ湖 100 kmウルトラマラソンです。このマラソンは強い達成感が得られる素晴らしいマラソンです。朝の2時に起床し、5時スタートし、13時間以内のゴールを目指すのですが、74 kmの休憩所にはお汁粉のサービスもあり、ルートは変化に富み、景観は神秘的です。過去3回完走しましたが、レース後も幸福感はずっと続きます。



第2位は、しまなみ海道 100 kmウルトラ遠走です。瀬戸内海に掛かる長大なブリッジからの眺めは美しく(特にサンセット直前)これまでに経験した中で最高に感動した眺めでした。休憩所でのオレンジジュース、冷たいおしぼり、素麺のサービスも魅力的でした。

第3位は、山口 100 荻往還マラソンです。これは 250 km・140 km・70 kmのコースがあります。私は 140 kmを 23 時間で完走しましたが、250 kmはリタイアしました。数多くのエイド(民家やレストラン)のサービスは大変素晴らしかった。

第4位は、東京マラソンです。参加者数を含め、大規模なのでマスコミの注目度も高い。参加者は皆張り切っていますし、コースはよく知っている都心であることも気分良く走れます。私はこれまでに3回参加しました。

第5位は、四万十川 100 kmウルトラマラソンです。清流四万十川の景観は言うまでもありませんが、主催者のホスピタリティーが最高です。ウルトラマラソンに興味のある方には最初に参加するにはここをお勧めします。

(第6位以下はマラソン名のみお伝えします。)

第6位：長野マラソン(フル) 第7位：ヨロンマラソン(フル) 第8位：奈良マラソン(フル)
第9位：大阪マラソン(フル) 第10位：讃岐の島ウルトラマラソン(100 km)

最後に、コントラクトブリッジについて申しますと、これはまだ日本では競技人口が少ないので、その点が私にとっては大変良い点ではありますが、パートナー選びには少々苦勞する点もあります。 以上。

スケールの大きな、興味深いお話しの後、Q&Aの時間となり、ご自身が撮影された動物の写真集「アフリカ」を拝見しながら、和やかな雰囲気の中に終了しました。(会員開発委員会担当 副会長 中川統夫)



ユネスコ・スクール 都立三田高校

ユネスコ委員 30 名の生徒さんが来室されました。

6月12日(火)と6月14日(木)の午後4時から、同高校のユネスコ委員 30 名の生徒さんが2組に分かれて、藤村由夏先生と猪原令子先生もご一緒に、当協会事務局に來られました。高井光子会長が話をいたしました。

会長の話しは、まず、UNESCO の誕生のいきさつについてから始まりました。「国連の専門機関であるユネスコは、第2次世界大戦後の1946年、このような悲惨な戦争を2度と繰り返さないためには、世界中の人々が教育、科学、文化を通じて、互いに理解し合い、偏見を取り去り、力をあわせて世界の平和と人類共通の福祉に貢献するのが一番いい方法であるという考えから生まれました。



敗戦当時、日本人はみんな打ちひしがれていましたので、ユネスコの謳う『世界の平和を守るには、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない』という理念に大きく共鳴し、世界に先駆けて仙台でユネスコ活動が始まり、日本各地に広がりました。この平和を願う日本人の活動が大きな効果を果たして、5年後にユネスコへの加盟が認められ、これが国際社会へ復帰する第1歩となりました。」

続いて、会長の子どもの時代の戦争体験などについての話となり、「平和を守るには、みんながお互いによく理解し合い、支え合うことが大事です。未来ある若い皆さんに大いに期待しています」と、話を結びました。(4頁に続く)

(3 頁からの続き) **後日、生徒さんから下記の感想文をいただきましたので、ご紹介します。**

***委員長 2年 今村風音さん**

先日は、お忙しい中、私達三田高校のユネスコ委員のために、すばらしいお話をしてくださって本当にありがとうございました。

私はまだ何をしたら良いのか分からないことが多かったので、お話を聞くことができ良かったです。今回話して頂いたお話の内容をできる限り多くの友達や三田高生に伝えられるようにしたいです。

特に印象に残ったことは、戦争の体験談でした。現在日本は戦争をしていないので、まだ続けている国々の子供たちなどに援助をしていますが、実は、日本にも戦争時代があって同じことを経験している方々がいたことを改めて理解しました。

日本の戦争とユネスコは関係がないのではないかと考えていましたが、日本が戦争を経験したからこそユネスコが日本にも設置されたのだと思いました。とても大切なお話を聞くことができ良かったです。

今年、三田高校では書き損じはがき集めを1年間行う予定です。しかし、まだボックスを作ったりポスターを作ったりしていませんでした。港ユネスコ協会に置いてある先輩が作ったものを見て、自分も早く作らなければいけないと思いました。実行すると決めたことは、絶対に実行し、少しでも困っている方々の力になれば嬉しいです。本当にありがとうございました。



***副委員長 1年 杉山沙暉さん**

先日は私達、三田高校ユネスコ委員のために、貴重なお話をありがとうございました。

私はまだユネスコ委員になったばかりで、ユネスコのことをよく知りませんでした。今回、実際に港ユネスコ協会を訪問させて頂き、自分がユネスコ委員であるという自覚を持つことができました。私以外の1年生委員も、同じように感想を申し添えておりました。

また同時に、「ユネスコと言えば世界遺産」「ユネスコと言えば世界平和」というような漠然としたイメージではなく、具体的にユネスコで行われている活動や、私たちがユネスコ委員として何をしなければいけないのかを把握することができました。

私たちユネスコ委員は、都立高校唯一のユネスコ・スクールである三田高校の代表として、ここで学んだユネスコについての知識をまわりに広める必要があると感じました。

三田高校ユネスコ委員は今年1年、震災の時に援助してくれた国々にお礼をする、という目標で活動していきます。いろいろと壁にぶつかることがあるかと思いますが、その時はご相談させていただけたら嬉しいです。

先日は、本当にありがとうございました。

***書記 1年 岡崎まどかさん**

この度は、私たち三田高校ユネスコ委員会のために、時間を割いてお話してくださってありがとうございました。滅多にない機会でしたので、とても楽しみにしていましたが、予想以上に凄く充実した時間でした。

私がユネスコ委員会に入りたいと思ったきっかけは、ユネスコの募金活動をやっている人達を見て、誰かの役に立てるのは素敵だなと思ったからです。ご存知のとおり、三田高校でも募金活動を行いました。そこでさらにユネスコについて興味が湧いたので、港ユネスコ協会に訪問できたのはとても良い経験になりました。今回の訪問を通して、ユネスコ委員会で感想等を発表し合っただけですが、このような意見が多かったです。それは、「もっと質問をしてみたかった」ということです。

港ユネスコ協会の会長様のお話を聞いて、私たちユネスコ委員は、それに関する事に興味や疑問、意見など訪問以前に比べて様々な思いを各個人持っています。ですから、いつかまた機会があれば、港ユネスコ協会様と交流をしたいです。

文化祭や委員会活動を通して、多くの人にユネスコについて知ってもらったり関心を持ってもらったりするために、より一層頑張りますので、どうかよろしくお願いします。私たちのために貴重な時間をありがとうございました。

《ユネスコ委員会の皆様とお話しでき、とても嬉しいひと時を過ごすことができました。会長》



ブラジルの家庭料理

講師 西村アメリカさん(料理研究家)

日時 2012年6月30日(土) 12:00~15:30

会場 港区立男女平等参画センター(リーブラ)4階料理室



日系2世で、ご主人が日本人商社マンである講師の西村アメリカさんは、18年前から日本に在住しておられます。ブラジル育ちのおおらかさを持ち、社交的な性格の持ち主の方で、日本語には全くご不自由されていないそうです。

まず、ブラジルの料理の歴史、時代による食文化の変化についてお話をうかがいました。ブラジルでは、時代順に、先住民インディオ、黒人奴隷、ヨーロッパからの移民、アジアからの移民などから、それぞれの民族の文化、習慣が伝わり、また、混じり合って、新しい料理が生まれました。広いブラジルですので、地方によって食文化に差があり、州によって食材の名前が違うとのこと。

今回は、リオデジャネイロの料理を実習しました。

【サラダ デ セノウラ(人参のサラダ)】

人参をスライサーでスライスして、パイナップルの汁で洗い、パイナップルとドレッシングで和えたさっぱりしたサラダ。ドレッシングが浸み込むようにスライサーを使うところがポイント。

【バナナライス】

本日のメイン。米はタイ米を使用。ぱらぱらでないとダメなので日本米では無理。ブラジルでは、赤米、黒米は食べるそうだが、日本米は食べないそうです。炊いた米、ミートソース、バナナ、パルメザンチーズを順に重ねて、表面にモッツァレラチーズをかけて、オーブンで焼く。



【ボン デ ケイジョ】

タピオカ粉に卵、牛乳、水、バターを入れてこねた後、チーズをすりおろして混ぜた生地を丸めて、オーブンで焼く。愛知県から取り寄せた今まで知らなかった味のチーズのおかげか、参加者に大好評な味に仕上がった。

【オリョ デ ソグラ(姑の目)】

ココナツパウダー、卵黄、コンデンスミルクとバターを捏ねて丸め、ラム酒で味付けしたプルーン1個を巻いて、目の形になるように成形する。ブラジルでは老若男女に愛される味で、手作りが基本。

今回の料理には、愛知県にあるブラジル人ご用達のスーパーからほとんどの材料を取り寄せて下さいました。参加者の方々もいろいろな国の方々がおられ、料理室にはポルトガル語が飛び交いながら、楽しくブラジル料理を楽しむことができました。

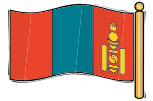


準備の段階からお世話になりました西村アメリカさん、参加者の皆様ありがとうございました。

(世界の料理委員会委員 金澤由里)

モンゴル人文大学訪日団

東京案内



今年 2012 年は、日本モンゴル国交樹立 40 年周年記念の年です。

モンゴルと強い絆を持つ宇都宮市に住む長門芳子理事は、いっくら（国際文化交流協会）創立 30 周年記念事業の一つとして、モンゴル人文大学訪日団一行を、6 月 16 日～6 月 25 日の 10 日間の予定で、国際交流基金の助成を受けて、日本に招聘されました。

団長のプレブスレン人文大学教授（女性）は、1993 年度外務省研修生として初来日、宇都宮で研修を受け、帰国後も交流を続けて、モンゴル人への日本語教育に長年貢献しています。副団長のバツァエハン准教授は、宇都宮大学国際学部博士課程終了、団員のゾリゴーさんも宇都宮大学工学部を卒業、お 2 人とも留学中「宇都宮大学 UNESCO 研究会」で活躍された経験をお持ちで、日本語を流暢に話されます。今回の訪日団の大学生は、日本語を学ぶ 1 年～4 年の 6 名（男性 1 名、女性 5 名）です。

一行は宇都宮市でホームステイをしながら、日本人の暮らしを実際に体験し、日本文化を学び、宇都宮大学の日本語授業に参加したり、「地球家族のきずな求めてー異文化と社会を考える両国学生の対話集会」、東日本大震災の被災小学校を訪れて生徒さんたちと交流したりしました。

せっかく遠い日本に来られるのだから、たとえ 1 日でも、東京を訪れる機会を持ってもらいたいという話が持ち上がり、港ユネスコ協会が招待することになりました。

ユース活動委員の青年会員の高橋直太さん、関友哉さん、前田佳澄さんたちが主になって、少々ハードなスケジュールになりましたが、中身の濃い、東京案内の 1 日を引き受けてくれました。

以下は出迎えから見送りまでずっと行動を共にしてくれた、高橋直太さんの報告文です。

訪問・見学コース：東京駅→都立三田高校→NHK→日本科学未来館→東京タワー→東京駅

<三田高校>

最初に、東京都立三田高等学校（及川良一校長先生）を訪問しました。同校はユネスコ・スクールに認定されています。国際理解教育に非常に力を入れており、「国際理解シンポジウム」等のイベントが開催したり、外国語の教育に力をいれたりしているそうです。

今回の訪問では、藤村由夏先生が私たちを案内してくださいました。

モンゴル人学生たちは英語と書道の授業を参観させていただきました。学生たちはたいへん熱心に日本の高校の授業の様子を見学していました。



モンゴルの歌を披露



及川校長先生と団長



書道の授業見学



モンゴル人文大学一行の紹介

<NHK>

次に NHK を訪問しました。社員食堂で昼食をとった後、青木良行・報道局国際部デスクが、特別のご厚意によって、ご案内くださり、実際にニュース番組を制作中のスタジオを見学させていただきました。

BS 放送で 24 時間世界に向けてニュースを発信している番組を見学させて頂き、普段滅多に入ることのできな

いテレビ番組制作の現場を見たモンゴル人学生たちは、興奮した様子で、まじまじと中の様子を見学していました。ここから送られてくる番組をモンゴルでも見ているそうです。特に大相撲中継は大人気とのことでした。



＜日本科学未来館＞

NHK の後、新橋から無人運転のモノレール「ゆりかもめ」に乗って、東京湾上を走ったところにある、日本科学未来館を訪れました。

毛利衛館長は、長門理事と日本ユネスコ国内委員を同時期にご一緒したご縁で、過密なスケジュールの中、ご都合をつけてお会い下さいました。

モンゴル人学生が一人ひとり自己紹介をしました。毛利館長は「モンゴル人初の宇宙飛行士だったジェクトルデミット・グラグチャさんを知っていますか」とモンゴル人学生たちに尋ねられました。学生たちは揃って「知っています」と答えると、毛利館長はご満足そうに、にこやかに頷かれました。

そして、毛利館長も一緒に記念撮影に入ってくださいました。学生たちは「素晴らしい思い出になる」と喜んでいました。



毛利衛館長とお話する長門理事と団長、団員の若者たち



ジオ・コスモスを背に記念撮影

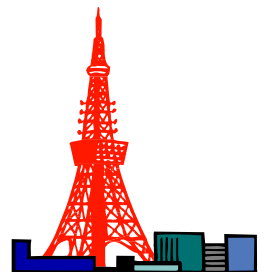
＜東京タワー＞

最後に東京タワーにのぼりました。展望台にのぼり、日本の中心地である東京を一望しました。

モンゴル人学生たちに一日の感想を聞いてみると、「とても楽しかったです。」「また東京に來たいです。」という声を聞くことができました。逆に「モンゴルにぜひ来てください。」と誘ってもらいました。

今回のモンゴル人学生たちの東京訪問が、日本とモンゴルの交流をさらに深めるものになったのではないかと思います。

(ユース活動委員会 高橋直太)



帰国後、モンゴルのソリゴーさんが、素晴らしい日本語で、次のような文を寄稿してくださいました。

＜都立三田高校訪問の感想文 ソリゴー＞

日本にいた時、お蔭様で、学校を幾つか訪問する機会をいただきましたが、東京の高校はまだありませんでした。日本は世界でも教育水準が高い国のひとつです。その国の中心地である東京、そして東京の中心地ともいえる港区に所在する都立三田高校を訪問できると聞いて、とても楽しみにしていました。

そして、実際に学校を訪問したとき、その教育水準の高さに驚き、さすがだなと思いました。英語、書道、音楽の授業しか見られませんでした。先生たちのこんなに熱心に教える姿は他では見たことがありません。

特に英語の先生の教える姿は見ものでした。モンゴルで、高校の先生がこんな人だったらなと思わず嫉妬してしまいました。生徒たちと話しして、交流することは出来ませんでしたが、礼儀正しくて、とても知的な感じが染み出ていました。

最後に、この機会をくださった港ユネスコの皆さん、都立三田高校の皆さんに感謝したいと思います。以上。

「外交とユーモア！！」

講師 大塚清一郎氏（元駐スウェーデン大使）

日時：2012 年 8 月 8 日午後 6 時 30 分～8 時 45 分

場所：港区立生涯学習センター305 号室

今回の講師には、元外交官でエッセイストの大塚清一郎氏をお招きしました。大塚大使は 1966 年の入省から 41 年間に亘り外交官のキャリアを送られ、この間、初代エディンバラ総領事、ニューヨーク総領事（大使）、駐スリランカ大使、駐スウェーデン大使など、海外の 7 カ国において重要なポストを務めてこられました。



実は、大塚大使が港ユネスコ協会(MUA)の活動にご協力下さるのは 2 回目となります。昨秋、MUA が創立 30 周年記念特別事業のひとつとして、港区立高輪区民センターホールで「歌と踊りで世界をめぐる」と題するステージ公演を開催した際、大学生のご子息と一緒にこれに出演して、すばらしい「父と子のバグパイプ演奏」をご披露くださったのです。

講演会当日、大塚大使はまことに凛々しい、スコットランドの男性の民族衣装として知られるキルトにジャケット、シャツ、ネクタイを身につけて登場され、参加者全員の目が大使のキルト姿にクギ付けとなりました。

大使は、「よくある質問」に答えるような形式で、スコットランドには沢山のキルト用タータン模様があり、夫々が異なる部族（クランと称する）を象徴していること、また、かつて部族間の戦争でこの正装をした上で吹き鳴らされたバグパイプは、あたかも日本の戦国時代のホラ貝のように、敵を威圧し、自軍の兵士の士気を鼓舞する目的で用いられたことなど、次から次へと興味尽きないお話をして下さいました。

その後、予めご用意下さったレジメに添って、（１）宰相吉田茂のユーモア、（２）内戦下のスリランカでの日本の和平努力、（３）社会福祉先進国スウェーデンの「光と影」、（４）「修羅場のユーモア」を教えてくれたスコットランドの友人、の 4 テーマに関して、外交官としての実体験に基づく貴重なお話を伺い、また、どんなときにもユーモアのセンスを忘れない大使のお人柄に接することができました。大変、中味の濃い、素晴らしい講演でした。

当日の会場は定員 60 名を超える参加者が集まり、大塚大使が“Icebreaker”として投げかけた自称「駄洒落」に爆笑に次ぐ爆笑が湧き起こりました。一方、スリランカの話では、「タミールの虎」のリーダーを相手に、命がけで和平交渉に当たられた大使の熱意と胆力に感心し、また、スコットランドの話では、第二次大戦中に日本軍の捕虜となり泰緬鉄道建設の過酷な強制労働に従事させられたジェームズ・ラッセル氏との、恩讐を超えた心と心の通い合いを体験されたエピソードを伺い胸がジーンとなりました。



そして、最後は、お待ちかねのバグパイプの演奏。昨秋も演奏して下さいった勇壮な「Scotland the Brave」と「アメージンググレース」に加え、日本の曲（赤とんぼ、浜千鳥）まで演奏して、参加者全員を魅了して下さいました。

参加者の皆さんから回収したアンケートからも、今回の講演が大好評であったことが裏付けられました。

紙面の関係上、ご講演内容の詳細は省かせて頂き、参加者に配布されたレジメを、次ページに紹介させていただきます。

(1) 宰相吉田茂のユーモア

昭和 41 年外務省入省後、同期生 24 人が大磯の吉田茂邸に昼食に招かれたことがありました。吉田総理は、期待に違わぬ「ユーモアの人」で、「外交におけるユーモア精神」について教えて頂いた次第です。帰り際に、「君達、一宿一飯の恩義を忘れてはいけないよ。今度は私が君達を訪ねて行く番だ。その時はよろしく頼むよ」と仰っていたのがとても印象に残ります。残念ながら、吉田さんは翌年の 10 月に逝去され、私達同期生は吉田さんに対する「一宿一飯の恩義」を返せないまま今日に至っております。

私は吉田さんから教えて頂いた「ユーモアの精神」を引き継いで、世界に友人の輪を広げることで、吉田さんに対する「一宿一飯の恩義」を返していきたいと常々思っております。

(2) 内戦下のスリランカでの日本の和平努力

内戦下のスリランカで大使として仕事をしていました頃（2000 年—2003 年）、和平交渉の場に勧誘するため、反政府グループの「タミール・イーラム解放の虎」（LTTE）の本拠地に何度も出かけて、裸のお付き合いをしたことがあります。幸い、ノルウェー政府の仲介努力により一連の和平交渉が始まり、2003 年 3 月、箱根のプリンスホテルで 4 日間にわたり、日本政府主催の和平交渉も行われ、それなりの成果がありました。その後、2005 年の総選挙を経て、スリランカの政権が交代し、新しく登場した強硬派のラジャパクサ政権（現政権）は、軍事強硬策を取り、2009 年 5 月、LTTE を軍事的に制圧しました。スリランカに永続的な真の平和が到来したのかどうかは疑問が残ります。当時の和平交渉に携わった私の経験をお話したいと思います。

(3) 社会福祉先進国スウェーデンの「光と影」

北欧諸国（スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク）は、社会福祉先進国と称賛されています。スウェーデンの消費税は、現在 25% で世界最高水準にあり、「高福祉高負担」の象徴的数字です。

しかし、今から 50 年前の 1960 年に初めて付加価値税として導入された時は 4.2% という低額でした。これを国民的なコンセンサスの下で段階的に引き上げ、1990 年に 25% に引き上げられて現在に至っています。

余り知られていないことですが、スウェーデンの「医療サービスシステム」は率直に申し上げて劣悪です。医者の質は良いのですが、医療サービスのシステムがよくないのです。社会福祉先進国スウェーデンの「光と影」の両面をよく見る必要があります。



(4) 「修羅場のユーモア」を教えてくれたスコットランドの友人



スコットランドのエディンバラで仕事をしていました際、ジェイムズ・ラッセルさんという当時 72 歳の元戦争捕虜の方にお会いしました。第二次大戦中、日本軍による泰緬鉄道建設のために強制労働に従事させられた経験をお持ちの方です。

私が思い切ってラッセルさんの家を訪ねたことがきっかけで、お付き合いが始まりました。そして、戦場という修羅場でもユーモアを忘れない兵士達がいたことを、彼から教えて貰いました。第二次大戦中のポーランドのアウシュヴィッツ収容所での悲惨な生活の中でも「ユーモア」を忘れずに実践したユダヤ人がいたそうです。ヴィクトール・フランクルというユダヤ人は、奇跡の生還を果たした後、『夜と霧』と言う本の中で、「ユーモアは自分を見失わないための魂の武器である」と書いています。

なお、本講演会の講演テキストを後日、港ユネスコ協会の Website に掲載する 予定ですので、内容の詳細にご興味のある読者はそちらをご覧ください。

（国際学術文化委員会担当 副会長 棚橋征一）

UNESCO ユース・フォーラム in みなと 2012

《宇都宮大学・大学院の留学生との交流》

日時：2012年7月21日（土）午後1時～4時30分

会場：港区立男女平等参画センター（リーブラ）5階ホール

協力：宇都宮ユネスコ協会青年部「宇都宮大学 UNESCO 研究会」（院生・学部留学生）

大勢の若者の参加を願って、中高生が夏休みに入る7月21日（土）を待って、2年ぶりに、第2回「UNESCO ユース・フォーラム in みなと 2012」を開催いたしました。

開催のいきさつなど

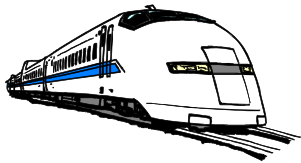
《港ユネスコ協会の青年会員は、いつの間にか激減してしまい、若者たちによるユース活動は休眠状態が続きました。もう一度若者たちに活動してもらえるようになって欲しいという願いが強まっています。

当港ユネスコ協会の設立時からの理事である長門芳子さんは、現在、宇都宮市に住み、宇都宮ユネスコ協会会長ですが、宇都宮大学で留学生対象の授業を担当したことから、親身に彼らの世話を行っておられます。

そして、宇都宮ユネスコ協会青年部「UNESCO 研究会」（宇都宮大学・大学院の留学生）による「UNESCO ユース・フォーラム in 宇都宮」を、市内の中高校生を対象にして、2006年から毎年続けておられます。

留学生にとっては、自国を紹介できる機会であり、参加する中高生にとっても、外国の留学生から直接お国のことを聞き、話を交わす貴重な機会となる意義深い事業であると好評だと伺いました。

留学生の方々は、時間をかけてパワーポイントを使って、プレゼンテーションの準備をされておられるとのことでした。



また、東京駅まで新幹線で約1時間の宇都宮市であっても、学問とアルバイトに忙しく、東京・宇都宮往復の費用は高くつくので、東京に来ることなく帰国する留学生もいることを知りました。

そこで、そのプログラムを東京の港区でも行っていただけないかとお尋ねしたところ、留学生は「花のお江戸で、自国紹介ができる！新幹線を体験できる！」と意欲を示して下さり、港区での開催が実現しました。》

さて、今年7月21日の早朝、留学生9名と吉田一彦宇都宮大学国際学部教授と長門理事らは、宇都宮を出発し、JR田町駅近くの会場・港区立男女平等参画センター（リーブラ）に午前10時に到着し、会場設営を手伝いながら、開場の12時半までリハーサルを続けました。

当日からラマダン（断食月）が始まったとのことで、イスラム教徒のモロッコのモハメドさん、モーリタニアのバリーさん、そして、中近東の女性留学生Nさんは、昼食の時間にお祈りをなさり、お弁当にも手を付けません。ラマダンの間は日の出から日没までは、食事はもちろん水分も口にできないと伺いました。

開会は午後1時

総司会は、港ユネスコ協会青年会員の高橋直太さんと関友哉さんが担当です。



プログラムは3部構成になっています。

1. 留学生による母国紹介
2. 留学生によるパネルディスカッション
3. 「みんなで歌いましょう」

第1部:留学生による母国紹介

各々がパワーポイントを駆使し、自国の珍しい映像などを写し、ユーモアを交えて日本語で紹介されました。

- *モンゴルの「都市と草原の生活文化・伝統文化」についてのプレゼンテーションは、ハマさんとウンダラルさん、ともに国際学部研究生です。
ウランバートルなど都市に住む人は、草原にはたまにしか行かないとのこと。
また、モンゴルで今流行っている歌「お母さんお誕生日おめでとうございます！」を、歌の上手なウンダラルさんが披露して下さいました。



- *モーリタニアの「遊牧民の伝統・文化」発表：アデマ・バリーさん（農学部研究科修士課程）



日本に来てまだ約1年なので、英語でのプレゼンテーションとなりました。
吉田教授が通訳して下さいました。
テレビなどでもあまり紹介されることのないお国ですので、人々の暮らし、また、遊牧民の生活は興味深く聞き入りました。同じ民族の人々が、同じ経度に、国境を越えて広がって住んでおられるということを知りました。

- *「中国・内モンゴル自治区の中国人の日常生活」発表：劉暢さん、劉洋さん。

共に、教育・国際学部修士課程で学んでいる同じ内モンゴル自治区の漢族のお二人ですが、日本の約3倍の面積を持つ内モンゴル自治区の東と西の都市のご出身なので、列車で20時間かかるほど離れているそうです。

内モンゴル自治区といえども、モンゴル族は17%に満たず、79%は漢民族が住んでいるとのことを知りました。



- *「中国大学生の就職状況」発表：ハン恵媛さん（教育学部修士課程）



一人っ子政策で生まれ、育てられた世代なので、子ども一人に祖父母、両親の6人から深い愛情を注ぎこまれ、どうしても独立心が弱くなるとのこと。

大学が各地に急に増えたので、学生は卒業しても60%位しか思うところに就職できないとか。今の日本と共通の若者の状況などが紹介され、とても興味深く伺いました。

- *「モロッコ王国、そしてモロッコの遊牧民の伝統・文化」

発表されたウムリル・モハメドさんは、工学部研究科修士課程で、建築について研究中。6か国語を理解されるそうですが、在日期间が浅いので、日本語で複雑な説明はまだできないとのこと、英語でプレゼンテーションをされ、吉田教授の助けを借りての説明でした。

どこに留学しようかと考えた時、安藤忠雄に惹かれて、日本を選んだとのこと。



- *中央アジア・キルギスの伝統楽器「コムズ」演奏と紹介をなさるのは、アセリさん（国際学部博士前期課程）。



三味線に似た「コムズ」はキルギスでは、誰もが小さい時から習い、歌いながら演奏できる楽器だそうで、どの家にも大事に飾っているそうです。

どこことなく哀愁を帯びた美しい音色です。これが、シルクロードを経て、日本に届いたのでしょうか。

大学の附属保育園に通うヌルメル君は、日本語しか話せないとのこと。伝統の帽子と民族服でお母さんと一緒に参加してくれました。



第2部:留学生全員によるパネルディスカッション

高橋直太さんの気取らない司会振りのお蔭もあって、留学生の皆さんは、活発に、本音を話して下さいました。

話題になったのは、

** 留学先を日本に決めた理由は？

** 母国にいた時の日本のイメージは？

** 日本にきて苦労したことは？

** 母国と日本の習慣や常識の違いで驚いたことは？

** 将来、どこでどんな風に生きて行きたいですか？ などでした。



参加者側からも次々といろいろな質問が出てきました。ユーモアのあるやり取りに笑い声や笑顔がみち、会場は大いに盛り上がりました。

第3部:みんなで歌いましょう！

まずは、清水軍治 港ユネスコ協会理事のアコーディオン独奏や歌。

その後、アコーディオンに合わせて、参加者一同で、「ドレミの歌」「ふるさと」「幸せなら手をたたこう」「世界で一つだけの花」などを楽しく歌いました。

「世界で一つだけの花」は、モンゴルでは、「日本語の勉強のため」に習う歌だそうです。



和やかな雰囲気の中に、閉会の時間となりました。

閉会に際して、お礼のことばを キルギスのアセリさんからいただきました。

「留学生として自分の国を離れると異なる文化に接触したり、異なる言語で話したり、新しい友達や家族を作ったり、母国の恋しさといろんな体験をします。もちろん留学先で勉強したことが、一生かかかっていく大事な勉強になることが多いと思いますが、その中でもっとも楽しいのは、そのような場で、自分の国を紹介することだと思います。

みんな自分のアイデンティティと誇りを持って自国の紹介をしたと思います。 普段は、このような大学生以外の方々との交流のチャンスはあまりないのですが、私にとってキルギスを一人でも多くの方々に知ってもらいたいと思って今年も参加しました。

港ユネスコ協会主催のフォーラムは2回目です。そして、新幹線で上京、ご招待していただき、自分の国を紹介出来て本当に嬉しいです。ありがとうございました。

港ユネスコ協会の準備をして頂いたみなさまに、参加した留学生を代表して心より感謝申し上げます。

キルギスの、博士課程留学生 アセリ」

後日、参加者から感想文をお送りいただきましたので、次ページにご紹介させていただきます。

(1) <宇都宮大学農学部研究科修士課程 モーリタニアのバリーさん>

東京での7月21日と宇都宮での27日のユース・フォーラムは、どちらも私にとっては、多くの留学生と知り合い、異なる世代の日本人と出会えた素晴らしい機会でした。これらの交流事業を通してとても良い印象を持ちました。

ただ、私には初めてのプレゼンテーションだったので、東京ではあまり上手にできなかったのではないかと少し悔やまれますが。しかし、とても興味深い体験でした。(原文は英語)

(2) <雙葉学園・高等学校2年 畑中理沙さん>

あのような国際交流の場に参加したのは初めてだったので、とてもよい経験となりました。特に、当日も申し上げましたが、普段触れることのないような国々の方々と交流させていただけて嬉しかったです。また、ディスカッションでは学生さん達の『日本で頑張りたい!』という熱意が伝わってきて、「これから社会を担っていかねばならない世代として、自分も頑張らなければ」、という思いも抱くことができました。皆さんと本音で話し合うことが出来て、良かったです。

今回の交流を通して、様々な文化に触れることの楽しさ、そして大切さを学んだので、これからも様々な文化に触れて、学生さん達のように積極的に『外』の世界に出ていけるような人になりたいと思います。

(3) <聖心女子学院高等科2年 佐藤真名さん>

今回「UNESCO ユース・フォーラム in みなと2012」に参加させて頂き、留学生と交流するというのをさせて頂きました。

留学生による母国紹介ではパワーポイントを用いて流暢な日本語で丁寧に説明してくださり、国名は知っていても、母国語についてや、伝統文化、豊かな自然についてなど知らないことをたくさん知ることができ、とても楽しく充実したひと時となりました。

私は留学生からの質問でとても印象に残っていることがあります。それは日本人の学生は国際へ目を向ける人が少ないというのは本当なのか?といった問いかけでした。

私は留学を希望する人が減ってきているということを目にしたことがありましたが、私の周りには外国のことをさらに知りたいと思う人がたくさんいます。日本という国が外国の方から見て国際交流に消極的な国と思われてしまっているのかな?というように感じ、少し心が痛みました。しかし国際語である英語に対する壁が少なからずあるというのが現状ではないかなと思います。

留学生との交流という体験を通して、例えば国籍が違っていても言葉が通じれば話し合い分かち合うことができるということを身を以て実感いたしました。

相手の国について知ることが多文化共生への一歩であり、国際交流への一歩でもあると思います。このような経験は、私にとってかけがえのない思い出の1つとなりました。また、普段なかなか触れ合う機会がない外国の方のお話を伺うということはとても貴重な体験となり、本当の意味での国際交流についても改めて考えさせられた時となりました。今回感じたことや学ばせて頂いたことに感謝し、日々精進して参りたいと思います。ありがとうございました。



まとめ： 開催日が近づいても、参加申し込み者数が伸びず、気を揉みました。が、お蔭様で、参加者の方々から、「楽しい集まりだった」「いろいろ考える機会になった」「よかった」などとおっしゃっていただき、開催した甲斐がありました。宇都宮から来て下さった皆様と参加者の皆様に心から感謝いたします。

日本に来られているいろいろな国の留学生と、日本の中高生や大学生など、そして年代の異なる日本人との、和やかな話し合いや交流の場が、東京の港区でも以外に少ないことを、あらためて感じました。これからも、できればこういう交流は続けていければと思いました。

(ユース活動委員会担当 会長 高井光子)

事務局便り



【ようこそ 新入会員】 個人会員：中居洋子さん、森江眞理子さん、石原明子さん、川島ひとみさん
青年会員：高橋直太さん、前田佳澄さん

【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆9月4日～12月11日 英会話中級クラス 毎火曜日 18:30～20:30 コース全14回
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立リーブラ（田町）
- ☆9月5日～12月12日 英会話初級クラス 毎水曜日 18:30～20:30 コース全14回
講師：マーク・マードック先生 会場：港区立麻布区民センター
- ☆9月28日（金）18:30～20:30 国際理解講演会 テーマ：「日本外交と領土問題」
講師：当協会理事、東郷和彦元駐オランダ全権大使、京都産業大学世界問題研究所長
会場：港区立生涯学習センター305号室
- ☆10月6日（土）～7日（日）みなと区民まつり 会場：芝公園4号地第5ブロック
- ☆11月10日（土）13:30～16:00 茶の湯体験教室 会場：港区立生涯学習センター203号室
- ☆11月13日（火）18:30～20:30 港ユネスコ協会シンポジウム 会場：港区立麻布区民センターホール
テーマ：「これからの私たちの暮らし：エネルギー需給と気候変動を考えて—3.11から学ぶこと—」
コーディネーター：永野博 当協会理事、政策研究大学院大学教授、元日本ユネスコ国内委員会事務総長
キーノートスピーカー：テーマ「明るい社会（低炭素化など）を目指して」
山田興一氏 低炭素社会戦略センター副センター長、科学技術振興機構、東京大学
第2スピーカー：山本英一氏 荒川区環境清掃部環境課長
第3スピーカー：屋代知行氏 つくば市企画部企画課主任
- ☆11月17日（土）12:00～15:30 世界の味文化紹介（詳細未定） 会場：港区立リーブラ（田町）

【ご寄付 ありがとうございました】

(A) 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金（奨学支援奨学金として）日ユ協連へ送金。

☆6月30日「ブラジルの家庭料理」講師を務められた西村アメリア様 ￥20,000

☆8月3日 国際学術文化講演会「外交とユーモア」会場での募金 ￥8,793

☆都立三田高校様から書き損じハガキと事務局のハガキポストの換金 ￥4,905

(B) ミンダナオ子ども図書館への支援義援金

☆2012年7月4日 王黄麗恵様（永井美智子様を通じて） ￥10,000

(C) 港ユネスコ協会の運営費として 高井光子様

￥21,600



【日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金】 常時受け付け中

【ミンダナオ子ども図書館への寄贈品】（衣料品など：新品、中古品[洗濯済]、除・毛織物）事務局まで。

港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

■ 編 | 集 | 後 | 記 ■ ◆日本選手団が史上最多となる38個のメダルを獲得して、ロンドンオリンピックが閉幕した。オリンピック期間中は、新聞を開くのもまづスポーツ面からとなった。1面や社会面が、人間の浅はかさや愚かさが引き起こした不祥事の記録に満ちているのに対して、オリンピック関連記事は、人間が持てる能力を極限まで発揮した結果達成された輝かしい記録に満ち溢れていたからだ。複雑な気持ちを味わった2週間でもあった。（須田康司）◆家内の誕生日祝いを兼ねて、都心のホテルでほんの数日、リトリートを楽しみました。すぐそばの映画館で、気になっていたアウンサンスーチーの半生を描いた作品「The Lady」がかかっていたので、これを観ました。マレーシア出身という中国系ハリウッド女優ミシェル・ヨーの演技がすばらしかった。信念を曲げることなく、次から次へと降りかかる試練に耐え抜く民主化運動指導者の生きざまを見ながら、家族愛、人権、平和等々、いろいろなことを考えさせられました（棚橋征一）。◆何事も1年やってみないことには、様子が分らない面があると思うが、だいぶ仕事には慣れてきた。新入会員をいかに増やすか、現会員のリテンションをいかに保つかを役員の皆さんと考えながら、仕事の質を高めて、時間を減らす努力をしていこう。引退してから復帰し、金メダルをとった選手もいることだし、もうひと踏ん張りするか。（富田晴雄）◆夜型の私はオリンピックは出来るだけライブでテレビ観戦した。若い力の躍動、より上を目指す強い意志力、表彰台の選手たちの輝く笑顔に感動しながら、ふと、かつて100歳の仲良し双子で人気者になった金さん銀さんの笑顔を思い出した。今、銀さんの娘4姉妹の平均年齢は93歳で、みんな揃って自分のことは自分でできるほどのお元気で、仲よく行き来しておられるとのこと。高齢者に希望を与える代表者としてぜひ銅メダルを。（高井光子）

Eメール：info@minatounesco.jp

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp/>